

## マレーシアの漫画における混濁性— —少女漫画家カオルのキャリアを通して

Gan Sheuo Hui 顔暁暉

マレーシアでもっとも優れた少女漫画家のひとりにカオルという作家がいます。彼女は中国系マレーシア人ですが、日本語のペンネームを使用し、マレー語で主にマレー人の読者に向けて作品を送り出しています。型にはまることのないこのようなカオルの作品は、一昔前のマレーシアでは想像もできないことでした。カオルの作品は、様々な文化的要素を選び、変容させるという積極的な形式を見せています。より正確に言えば、マレーシアのような多民族社会において注目すべきである、わかりやすい「ローカル・スタイル、つまり地域特有のスタイル」を見せることなく、「ローカル・アイデンティティ」というオルタナティブな形式をあらわしているのです。さらに、カオルの作品が英語や中国語に翻訳され、シンガポールや中国に輸出されると、彼女のマレーシア人としての国民性ではなく、華人としての民族性が強調されることになります。

カオルは新世代の漫画家だと言えます。新世代の漫画家とは、従来の地理的・国家的制約によってアイデンティティが縛り付けられていない世代を指します。本発表では、カオルのキャリアを、日本の漫画が伝わった歴史的経緯と、中国系マレーシア人のコミュニティとメディア製品の関係を通して考察していきます。独特な視点が生まれた新世代のクリエイターを受け入れる地元の読者が根付いたのは、この伝播によるものだと思います。このような歴史的分析は、中心から広がるムーブメントというよりは、外側からのアプロプリエーションの形式としての伝播に目を向けるという新たな見方を提供してくれます。本発表では最終的に、女性によって女性のために作られた日本漫画をベースとしたマンガが、マレーシアの複雑な文化コミュニティ間の開かれたプラットフォームとして役立っているのかどうかを検討していきます。

### 公営メディアと不透明な（曖昧な）少女マンガに見られる「マレーシア」

「マレーシアのマンガ（漫画？）文化」という概念は、未だに発展途上だと言えます。なぜなら、マレーシアという近代国家を形成している多様な地域（ペニンシュラマレーシアやマレーシアボルネオ）における混合文化のアイデンティティは、まだ政府やメディアによって形作られている途中だからです。兆候的なものとして、マレーシア観光局の有名なキャッチフレーズといくつかのプロモーションビデオのメインテーマである「マレーシア、真のアジア」というものが挙げられます。

プロモーションビデオは、マレーシアのカラフルでエキゾチックなイメージであふれています。やむを得ず表面的になってしまっていますが、観光事業にとっては説得力のある主張をしていると言えるでしょう。この手の広告でよく知られたものとして、他にはペトロナスという、石油やガスの供給を行う国営企業の広告が挙げられます。

外国人や現地の視聴者を対象としてメディアが作り上げたこれらのマレーシアのイメージには、様々な課題が含まれていることは言うまでもありません。にもかかわらず、両者のプロジェクトは望まれ、理想化されたマレーシアの多民族のイメージなのです。たとえ、このようなメディアによる投影が常に変化していくものだとしても、それらのイメージは、ほとんどの国産のマンガに見られる“cool culture”という現代的視点を、異なったバックグラウンドをもつ人々にもたらすこととなります。たとえば、カオルの作品はたいてい、舞台となる場所がはっきりしていません。彼女の物語設定はしばしば、空想的で曖昧なものなのです。2005年にマレー語で出版された『だいすき』という作品では、舞台がマレーシアの首都であるクアラルンプールにはっきりと設定されているものの、街の景観やファッションがどこことなく日本に似た架空のクアラルンプールのように見えます。マレーシア社会の道德規範を損ないかねないきわどいファッションや描写を避けるために、このような日本的要素が現地の感性と融合されています。そうすることで、検閲を懸念する権力者にも受け入れられる「別の」クアラルンプールを作っているのです。

### マレーシアの文脈におけるカオルの位置づけ：日本の漫画スタイルを用いた華人読者とマレー人読者の両立

カオル<sup>⇒</sup>（本名 Liew Yee Teng）は1982年に生まれ、マレーシア半島の中心部ペラ州で育ちました。彼女は広東語を母国語とし、地元の中国語学校に通っていました。仕事仲間やファンとのつきあいのほか、彼女の日常やソーシャルネットワーキングはいまだに地元の中国語圏のコミュニティに限られています。高校を卒業した18歳の頃、Gempakでマンガ部門のアシスタントとして働き始めます。それから二年後、彼女はプロの作家としてデビューし、恋愛マンガを担当することになりました。今では少女漫画の第一人者とされています。今まで、四つの作品を掲載した単行本一冊と、8巻に渡るシリーズを出版しており、最新作の『Maid Maiden』はいまも連載中です。

カオルの初期の作品と後期の作品を比べてみると、画風やビジュアルデザイン、そして特にレイアウトに段階的な変化が見受けられます。いまや雑然とした印象は薄くなり、スムーズにイメージが流れるよう、ディテールを入念に作りこんでいます。さらに、彼女の人気は急速に高まったため、初期の白黒とは異なり、最近の作品の多くはカラーで出版されています。経歴全体にわたって、彼女は日本の漫画に見られる流行の画風や新しく人気の出たテーマのあとを辿っています。そのことは、カオルの最新作である『Kaoru's Cake House』や『Maid Maiden』に見られる美男子や制服（メイド服）の女の子からもはっきりわかります。

カオルの人気は、マレー人コミュニティからのサポートに基づいている点で特殊なもので、彼女のプロとしての道のりは独特です。なぜなら、ほとんどの華人家庭では、長時間労働・低賃金を強いられる漫画産業よりも、経済的に報われる仕事のほうが好まれているからです。一般に、芸術やデザイン関連の仕事は、華人コミュニティでは重要度が低いとされています。もちろん、カオルの成功は一部の親にとって新たな方針を持つ可能性をもたらしました。

また、カオルのような日本的なネーミングは、マレーシアにおける日本の人気を表しています。カオルは現代の日本が好きあまり、直接経験するため日本を訪れてもいます。ほとんどの読者にとって、日本は訪れることのできる実在する目的で国というより、想像上の空間です。それゆえ、日本風のペンネームは感情的に否定されにくくなっているのです。それは言い換えると、彼女の持っている中国姓を排除するこ

とで、読者を魅了したり、地元の民族的な懸念から解放したりすることができるのです。この論理に従うと、カオルは中国語で書いた後に会社が翻訳するのではなく、始めからマレー語でセリフを書き、それを修正する校正者がいることとなります。カオルの作品がもともとマレー語で制作され、その後に中国語や英語に翻訳されていることは注目に値します。作家も、ストーリーをできる限りニュートラルになるよう細心の注意を払っており、カオルの作品を見てみても、マレーシアをなんとなく参照した場所や掲示板、学生服などを見つけることができます。このような関連性は、強すぎる地理感覚を生み出さずに、親近感をもたらします。

政府（KDN）がキャラクターの性的関係や性描写を厳しく規制しているため、伝統的な道徳の侵害は、マレーシアでの漫画の制作・販売にとって重要な問題となっています。このことは当然、カオルの作品の中核である恋愛少女漫画に影響しています。キスシーンはおろか、エロティックな行為は許されておらず、子どもへのキスは許されていますが、男女間のキスは許されていません。また、銃を描くことは許されていますが、人に銃口を向けているところを描写することは当然禁止されており、人の死を冒瀆するような不適切な表現も許されていません。タイトすぎる服装も禁止されています。数年前、クアラルンプールの紀伊国屋書店に、親がカオルの作品『Daisuki』に対し、主人公がミニスカートををはいた表紙のイラストがあまりにもセクシーすぎるとクレームをつけ、返品をしたことがありました。その後、表紙は保守的なモノに差し替えられたのですが、興味深いことに、オリジナルであるセクシーなバージョンも同じ本屋で買い求めることができました。これは言うまでもなく、Gempak Starz が読者に選択肢を与えたということです。編集者によると、このような事態は、漫画を子どものメディアだと捉えている政府の考え方が原因になっているようです。ロマンティックなシチュエーションの描写に関する公的な規制の境界と戯れることは、カオルの作品の魅力に繋がっています。

## おわりに

カオルの経歴に関する以上のような検証は、今後の考察や調査への重要な課題を浮かび上がらせました。まず、多民族国家としてのマレーシアの背景に反して、様々な民族間の情報交換は、偏見や言語の壁によっていまだ制限されているということです。カオルの作品が多言語で受け入れられていることから明らかなように、民族を越えた漫画の人気は予想外であると同時に興味深い進展でもあります。漫画はマレー語や中国語、英語で広く若者に読まれています。このような多民族の読者は、観光促進を越えた「真のアジア」社会の実現という問題を浮き彫りにしました。漫画はマレーシアにおけるコミュニケーションや融合のためのニュートラルなプラットフォームとして機能する見込みがあるように思われます。このようなプラットフォームはついに、トークやコスプレなどファン同士のイベントを通して民族グループ間の交流を促すことができました。トークやコスプレなどの場では、互いにリラックスでき、最終的には互いの違いを受け入れることが出来るのです。マレー語で出版しているメジャーな女性中国系マレーシア人作家を知るには時期尚早ですが、カオルの作品は、それが可能であることを示しています。

第二に、既に述べたように、カオルの作品を含めたマレーシアの日本漫画ベースのマンガは、特定の地域の描写を避けがちであるということです。カオルや彼女と同国人の作品において、日本の漫画文化は、日常生活において民族間の緊張が比較的希薄な架空の場所を作り出す傾向があります。このことは、マレーシアの複雑な状況のせ

いで明確な地域性に対して偏見をもつ読者が容易に生まれかねないという理由から、とても重要です。多民族コミュニティは、世界中でありふれたものになってきているため、フランスやアメリカのような国で、日本漫画のスタイルがファンのコミュニティのための民族を越えた場として機能しているかどうかという問いが生じます。

第三に、カオルのような作家が作る少女漫画は、民族を越えたマレーシア女性に効果的に届けることができます。恋愛やファッションは女性的な領域に適していると思われれます。なぜなら、このような女性向けのステレオタイプなテーマは、男性中心主義や検閲から逃れる可能性を持っているからです。日本のボーイズラブの同人誌に似たファン作品は、ネット上やコミックマーケットで見られます。それらは、調査されずとも女性の漫画文化が確かに存在していることを示唆しているのです。マレーシアに関しては、このことは、他の漫画のジャンルや他国の漫画に影響を受けたマレーシアの漫画と、少女漫画の民族を越えた人気の比較をしていく必要があることを示しています。

最後に、カオルのマレー語の漫画は、地域への関心を引き出す日本の漫画を彼女が流用していることを明らかにしましたが、これらの側面は、日本では普及していません。異文化間の伝達についての議論は、日本による海外普及の考えとは大きく異なった流用であるという考え方を考慮する必要があります。マレーシアのコンテンツが日本に渡っていないため、これは文化交流とは異なります。日本企業のために工場や海外支社を設立したり、日本製品の消費者を探したりするなど、日本のビジネスの関心はアジア中に広がっているため、日本漫画のスタイルの人気は日本が発信したものだと見なされる傾向があります。しかしそうではなく、マレーシアの場合、華人コミュニティを通してマレーシアに入ってきた、台湾や香港において中国語で出版されている日本漫画の海賊版が現れたことは、文化の盗用の複雑な形であるように思われます。これは、海外市場に向けられた日本のプロモーション活動というよりはむしろ、ファンの情熱や盗用から生じた、ヨーロッパやアメリカでのマンガの翻訳や出版と似ています。今日、マンガを広めようとする日本政府は、日本のメディアがしかけたわけではない世界的マンガブームを今になって利用しようとしています。最近まで、漫画的なスタイルやテーマの出現は、韓国や台湾のような日本近隣諸国や欧米で、批評的関心を寄せられていました。「周辺」だと言われる地域での漫画の役割に焦点を合わせることで、世界中の読者の関心事である問いへと行き着くことを、カオルの作品は示しているのです。